

選択国語「国語学講座」の実践から

酒井 秀樹

一 はじめに

国語で、苦手な分野は何かと中学生に尋ねると、ほとんどが「文法」と答える。「主語・述語がちつともわからない」「修飾語ってなあに？」

そんな一年生と文節の学習をする。

庭に黄色のたんぼぼがたくさん咲いた。

「さあ、この文を分けてみてご覧。」
答えは大方二つ。

A 庭に黄色のたんぼぼがたくさん咲いた。
B 庭に黄色のたんぼぼがたくさん咲いた。

AとBの違いを考えさせる。

「Aは、順番入れ替えられるけど、Bはできない。」
「でも、『咲いた』は最後にくるよ。」

「黄色の」は「たんぼぼ」の前でないとおかしい」

「Aは辞書に載っていないけど、Bは載ってる。」

「『の』とか『に』はつなぎ言葉。」などなど。

ここでいつも授業をまとめる。「たくさん気がついたね。みんなの考えてくれたのが文法なんだ。みんなが使っている言葉にどんな特徴があるか、これから一緒に勉強しよう。」

生徒は、言葉に対して本当に豊かな感性をもっている。それを「難しいことをたくさん覚えなければならぬから、文法は嫌い。」で片付けさせたくない。そんな思いで、この講座の開設を考え始めた。

二年生になり、講座開設に向けて種を播く。

「どうして、猫って『ネコ』というんだろう?」

「どうして砂糖の味を東北と九州が同じような言い方をするん

だろう。」（『砂糖の味をどう表現するか』の単元で 昭和5
8年度 光村図書）

生徒は、さまざまな答えを考え出す。「そう。そういうこと
勉強するのが国語学っていう分野なんだ。」

そして、二年三学期、選択国語「国語学講座」が十二名の生
徒と共にスタートした。

二 選択教科「国語学講座」

(1) 選択教科の位置づけ

附属長野中学校では、二年三学期より、「自分の意志で講座
を選択し、個々の目標を大切にして、個性の伸長を図る」こと
を目標に、八教科で十の講座を開設し、選択教科の授業を実施
している。必修教科の中で生まれた一人一人の興味関心に応じ、
選択教科でさらに個に応じた学習を進めたいと考えたからであ
る。平成九年度開設された選択講座は、表1のとおりである。

附属長野中学では、テープスライド方式で教育課程を組んで
いる。一二学期は週二十九時間を29番のテープをスライドさ
せて回している。三学期は、30番のテープを増設し、各教科
領域から時間を供出して、選択教科を位置づけている（表2・
3）。

（表1）平成九年度開設された選択講座

講座名	国語学	国際理解	身近な数学	環境科学	器楽合奏
教科	国語	社会・英語	数学	理科・技家	音楽
講座名	混声合唱	芸術	ニュースポーツの世界へ	金属加工	情報処理
教科	音楽	美術	保体	技家	技家

（表2）日課表

月	1	2	3	4	5	6
火	7	8	9	10	11	12
水	13	14	15	16	17	18
木	19	20	21	22	23	24
金	25	26	27	28	29	クラブ
土	裁量	裁量	学活			
	I	II	III	IV	V	VI

(表3) 授業時数

合計	裁量	クラブ	学活	道徳	選択教科		必修教科							一年	
					その他	英語	技術家庭	保健体育	美術	音楽	理科	数学	社会		国語
1155	70	35	35	35	0	140	70	105	70	70	105	105	140	175	一年
1155	70	35	35	34	10	139	69	104	69	69	104	139	139	139	二年
1155	70	35	35	35	35	140	105	105	35	35	140	140	105	140	三年

(2) 選択国語「国語学講座」の指導の方向

国語科でもその一環として「言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め、国語を尊重する態度を育てる」(「学習指導要領」)に重きをおき、「日本語の特徴に気づき、言葉を大切に生徒」の育成を目指して、本講座を開設した。その目標は次のとおりである。

- ① 日本語の特徴を知り、興味をもった特徴の生まれた原因を仮説を立てて追究する。
- ② 言葉の法則に気づき、言葉を大切にしようとする態度をもつ。
- ③ 追究したことをわかりやすく相手に表現する。

この目標を達成するために、学習形態を「学習テーマ追究」の形態とした。

必修の国語の授業の中で、「登場人物の言動や言葉の使い方に疑問をもち、一人一人が自分の追究してみたいテーマを決めて、テーマを追究する」展開を組む。すると生徒は、興味関心をもった言動や言葉を他の表現や言葉とかわらせて意欲的に学習を進めていく。

選択国語では、生徒が自ら意欲的に学習を進めていく学習形

態を取る必要がある。自分の興味をもった「学習テーマ」を意欲的に追究する中で、日本語のおもしろさや言葉の法則性を自ら発見する。それが、言葉を大切にし国語を尊重する態度がつながるのではないかと考えたからである。そこで、選択国語では「学習テーマ追究」の形態を次のように考えた。個々の生徒が自分の興味や関心・疑問点から「学習テーマ」を見出し、資料を収集し、仮説を立て、考察して結果をまとめる、という流れに基づいて自ら学ぶのである。

とはいえ、日本語がどんな特徴があるかわからないだろうし、教師の側でも、生徒がどんなことに興味関心があるのかわからないので、下段(表4)の表のように全体を三期に分け、年間指導計画を立てた。

(3) 講座の実際

講座を開設した一月、昭和58年度の光村図書教科書教材『日本語の特色』で、日本語を表記・発音・文法に分けて学習した。さらに、資料を作成し、語源・方言などを加え、幅広い生徒の興味関心に応じようとした。その結果、十二名の生徒は、「言葉の語源の共通性(樋口生)」「数を数える言葉のでき方(金子生)」「色の語源(羽生生)」「中国の諺の語源(峯村生)」「姓氏のルーツ(永谷生)」「類義語の使い方(長沢生)」

(表4) 年間指導計画

3 2 1 12			11 10 9 8 7					6 5 4			3 2 1			月
【第三期】 学習をまとめ 振り返る。			【第二期】 資料を選択し 結果を考察し 仮説を立てる。					【第一期】 日本語の特色 を知り、学習 テーマを決め る。						段階
○ レポートを作成 ○ 発表原稿 ○ 発表会			○ レポート作成 ○ 発表原稿 ○ 発表会					○ 京都方言レポート			○ 語源の特色 ○ 文法の特色			主な指導内容(○数字は時間数)
○ レポートを発表しよう ○ 発表原稿 ○ 発表会			○ 個々に応じ、資料選択・仮説の立て方・結果のまとめ方の指導					○ 学習方法を学ぼう			○ 表記の特色 ○ 発音の特色 ○ 語源の特色 ○ 文法の特色			○ 日本語の特徴を調べよう ○ 「日本語の特色」 (昭和58年度光村図書) ○ 発表の特色 ○ 文法の特色
								○ 学習テーマを決めよう						⑧
														⑩
														⑮

「流行語の特徴（梨本生）」、「助詞の使い方―明治期と現在の教科書の比較から―（小野生）」、「敬語の歴史（北村生・諏訪生）」、「南部めぐら暦の追究（田中生）」、「雨の使い方―英語と日本語の比較―（西村生）」のようにそれぞれテーマを決めて追究に入った。

三 生徒の追究

(1) 『敬語の誤用』のテストをし、謙讓語の使い方に興味をもった北村生

北村生は、第一期の間には、興味をもつ分野が見つからず、五月に入っても、なかなか学習テーマが決まらなかつた。日常会話では割合丁寧な言葉遣いをする北村生なので、教師が作成した『敬語の誤用』のテストをさせ、無意識の中で使っている言葉の感覚にゆさぶりをかけてみた。

駅のアナウンス 「北村さん、おりましたら、事務室にお越しください。」

TVの司会者 「さあ、どなたが出てまいりますでしょうか。」

先生に 「先生は出席いたしますか。」 などなど

テスト終了後、「どうして、この言葉の使い方は違うんですか。」という北村生に、「正しいようで正しくない敬語」（奥山益朗著 講談社）を紹介した。

謙讓語に使い方の間違いが多いことに気づいた北村生は、謙讓語を中心に「敬語の歴史を調べたい」という意欲をもった。そこで、現代の敬語の使い方を調査させるために、

- a できるだけ会話の多い小説
- b 中学生が割合よく読む小説

の二点を参考に書籍を選ばせた。

『いちご同盟』（三田誠広著 河出文庫）を調査対象にした北村生は、その中に謙讓語の使用がないことに驚いた。そこで今度は、明治期の『たけくらべ』（樋口一葉著）、大正期の『友情』（武者小路実篤著）を紹介し謙讓語の使用実態を調査させた。

二作を比べてみると、「『たけくらべ』の謙讓語の多くが単独で使われているのに対して、『友情』では、多くが「です・ます」と接続して使われている。「ここで教師は、「同時代の他の作品にも同じ傾向があるか調査する」ように助言した。

その結果、『友情』と同時代の『伊豆の踊り子』（川端康成著）にも、次の表（表5）のように『友情』と同じ傾向がある

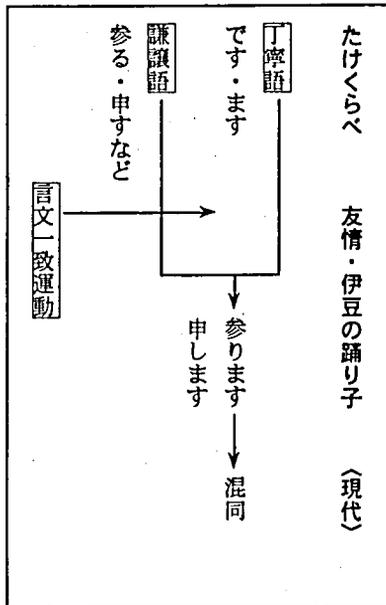
(表5) 謙讓語の使用表態

謙讓語	たけくらべ	友情	伊豆の踊り子	いちご同盟
致す		11 (1)	2 (2)	0
いたたく	1	6 (5)	1	0
参る	2	8 (8)	2 (2)	0
申す	5	8 (8)	2	0
おる	8	21 (2)		0
伺う	1			0

※ 括弧内は「謙讓語十です・ます」の用例数

ことがわかった。

それに基づいて北村生は、次のように考えた。



謙讓語の誤用のもとが大正期にあるのではないかと考え、それは丁寧語の「です・ます」が接続されることよって起こったのではないかと推定したのである。さらに、「たけくらべ」と「友情」「伊豆の踊り子」の文体が異なることから、「です・ます」が接続する原因として、言文一致運動の影響を考え、仮説に修正を加えながら自分の考えをまとめた。

(2) 他の分野の調査とかかわり、追究の方向に見通しをもつた金子生

金子生は、当初から数詞に興味をもっていた。数詞は種類が多いのに、「一つ・二つ」「一個・二個」が多用されていること。パイオリンと豆腐は、形も使う場面も違うのに、両方とも「二丁」と数えること。この二点に疑問をもったのである。

『日本文法大辞典』（松村明著 明治書院）で調査して、数詞の成立が

- a 形態や状態に基づくもの
- b その言葉のもつ内容が似ている

に分けられ、多くは前者になることを確認した。そこで学習テーマを「数を数える言葉のでき方」として考察を開始した。

しかし、中には分類ができないものもあった。「二羽」（兎、鳥類に使用）「一回」（会合、薬に使用）には、両用法に共通する特徴がなかったのである。

ところが、「兎」の語源については、偶然にも樋口生が調査していた。樋口生は語源に興味をもち、『日本国語大事典』（小学館）で任意の言葉を選び出し、その語源を

- a その言葉の内容から

- b 外来語

- c 言葉のでき方（転成・略語・複合語）

の三種類に分類し（表6）語源のでき方を追究していた。

そして「性質からできた言葉には地形を表すものが多い」「形態からできた言葉には動物を表すものが多い」「歴史は事の起源にかかわるものが多い」「中国からきた言葉は制度面が多い」「朝鮮語からきた言葉は体に関わるものが多い」と仮説をたて、追究を進めていた。

そこで、二人の考察を結びつける目的もあって、十月に中間発表会を行った。自分の追究してきた分野と異なる分野の発表が多く、多くの生徒は友達の発表を聞くだけで終わってしまった。しかし、今後の研究の見通しを金子生は、「兎と鳥の共通点が見つからなくて、困っています。」と発表した。それに対し、樋口生は、「兎の語源はいくつかあるが、かつて兎は『ウ』と呼ばれ、その姿が白いことから、その言葉の後に『鷺』がついたのではないかという説が『日本国語大事典』（小学館）に書かれていたこと」を情報提供した。

早速『日本国語大事典』（小学館）で確認した金子生は、「ウサギのサギは鷺と同系ではないかと書かれていました。鷺

自分の興味をもった分野から「学習テーマ」を決め、追究すること、仮説を立て、修正を加え、立証していこうとする学びの姿が金子生に見られた。

(3) 流行語を調べ、カタカナ言葉を意識しはじめた梨本生

「今日はチョー楽しかった。最初そのゲームをやると聞いたときは、メンドーだからヤダと思ったけれど、ゲームが始まったら、マジになっちゃって、熱中してしまった……」二年生の頃、梨本生が書いた作文である。梨本生に限らず、最近の生徒の中には、日常会話の中だけでなく、文章表記にもカタカナ言葉を多用する生徒が目立ってきた。

そこで、ガイドランスで次のような資料を提示した。

次の広告文から気づくことはありますか。

昭和27年

みなさん！顕微鏡がそれほど我々人類に幸福を与えてきたか、御存知ですか。我々の生命を脅かし、生命能力を奪っている結核菌の発見も……

(以下略)

平成7年

ちよつと前まではなかったけれど、今ではあたり前になっているモノ。たとえばキャッシュレスで買い物ができる……

(以下略)

「漢字の使用度が減っている」「カタカナの言葉が多い」「昔は外来語がカタカナだったのに、今はひらがなもカタカナで書いているのがある」「敬語が使われていない」などなど。さまざまな観点から意見が出された。梨本生は、こういう傾向がいつから生まれたかに興味をもち、調査を始めた。

『現代用語の基礎知識(平成8年度版)』(自由国民社)の若者言葉を中心に語例をカードに書き出し、それを形の面から分類した。文法は苦手だという梨本生なので、まず表記の面から「漢字・ひらがな・カタカナ・アルファベット」に分類するように助言したのである(表8)。

一番頻度の高いカタカナのカードを見て、梨本生は、「ロンバケ」は略語、「エアマックス」は英語、「チヨベリバ」は和製英語の略語など、さらに細かく分類できそうな見通しを得た。そこで、その分類法を他の項目でもできないか挑戦させた。表9は、その結果である。

ていましてした。」と感想を述べている。同じように田中生は「駄洒落にも法則がある。それを音節で分けて考えたら見えてきた。」羽生生は「日本で生まれた色は、外国に比べて比較的落ち着いている。しかも、植物からとつた色が圧倒的に多い。原色に違和感を感じるのもそのせいなのか。言葉一つで、好みがわかるのがおもしろかった。」と述べている。追究の中で、新たな発見をしたことが喜びの言葉になつてゐる。

また、金子生のように「これだけたくさんさんの数詞を全部把握している人は何人いるでしょうか。これが英語にない日本語の難しさであり、日本語のおもしろさなのだと思います。わたしはこの追究をしてみても、日本語のおもしろさ・深さ・温かさがわかつたような気がしません。」と感想をまとめてゐる。ここには、自らの言語環境を振り返り、何気なく使つてゐる日本語のかけがえのなさに気づいた楽しさを感じることができると、峯村生も「日本語はたくさんさんの外国語の影響を受けてゐる。決して日本人の知恵だけでできたものではないと思います。でも、それをまとめたのは日本人の知恵です。これが日本語だと思ひます。」と脈々と言葉を育んできた先人の努力に思いを馳せてゐる。

(b) 「学習テーマ」を設定して追究する楽しさを感じ取る

ことができた。

梨本生は、文法が苦手で、「品詞に分けるみたいな調査なんか、この講座ではやりたくない。」といつてゐた。しかし分類していく上で品詞分類が必要になり、いつのまにか品詞による下位分類を行なつてゐた。調査後本人は、「文法やりたくないつて言つてゐたのに、いつのまにか文法やつてゐた。」と語つた。ここに、覚えるための文法ではない、必要感に根ざした文法学習ができたように思われる。これは、自分の興味にもとづいて、「学習テーマ」を設定し、その調査方法も、個人個人によつて異なる学習形態をとつたためであると考えられる。追究そのものにおもしろさを感じてゐる感想はほかにも、「自分の調べたことを自分なりの方法で予想して調べていくのが楽しかった。(永谷生)」や「教科書を新しい目で見なおしていくことができて楽しかった。(小野生)」などにも見られる。

(c) 反面、「学習テーマ」も追究方法も十二人が十二人と

も異なる学習形態なので、どこに共通するところをもち、

それぞれの考えをかかわらせていくかという点はさらに研究していく必要がある。

今回の講座の中では、たまたま同じ言葉を調べた金子生と樋口生が言葉をかかわらせた事例は見られたがあくまで偶然に

すぎない。「学習テーマ」設定の場面である程度分野を絞って考えていくのか、追究の仕方がかかわらせていくのか、さらに事例を累積していく必要がある。

(2) 目標②にかかわって

(a) 追究の中で自ら発見した喜びが自分の言葉を大切にしようとする意識を芽生えさせた。

梨本生は、「今まで自分自身カタカナ表記を意識しないで使っていた。でも、そのほとんどがはやりの言葉のような気がしてきた。これが本当に日本語なの？という言葉も少なくなかった。

しかも、本来外来語を書き表わすはずのカタカナを、いつのまにかいろんな言葉に使っているのはいいのかなという気がしてきた。自分の言葉も、もう一回見返したい。」と述べている。

また、長沢生も「類義語には使い方や意味が一つ一つ違いがあることがわかった。最近日本語が乱れているといわれるが、そういう小さな違いを気づかずに使っているせいだと思う。自分の言葉も見返したい。」と述べている。これは、何気なく使っていた自分の言葉に対して、新たな課題をもったものと考えられる。

さらに、「私たちの先祖が作ってきた日本語を一つの歴史と

して受けとめ、知っていくことがこれからの私たちの課題であり、義務だと思えます。(金子生)」「わたしはこの日本人の知恵からできた日本語を大切にしていきたいと思えます。(峯村生)」「国によって文化・生活様式が違うから言葉も違う。私たちの使っていることばには、日本の文化があるような気がして、もっと大切にしなければ、日本の文化があるような気が感想からもわかるように、言葉を大切にしたいという気持ちは芽生えてきている。

これは、言葉の法則について、自分なりに新たな発見をした喜びが、意識しなかった言葉の歴史を意識させ、大切にしていきたいという気持ちにつながったのではないかと考えられる。

(b) この講座の中では、「では具体的にどうしていくべきか」というところまではいかなかった。言葉を大切に育てる態度の育成という点から見ると、きつかけを作ったにすぎない。年間計画の中にどうすることが言葉を大切にしていけることなのかを互いに討論し合う時間を設けてもよかったのかもしれない。

(3) 目標③にかかわって

最終発表会の前の二時間は、ほとんどの生徒が発表原稿を書

き、どの資料を例としてあげるかを検討していた。中間発表の時にそれぞれが異なる分野の発表であることを確認している生徒なので、自分が一年間かけて追究してきた発見をわずかの時間でわかつてもらおうと懸命の姿が見られた。

発見の喜びが大きいほど、自然とそういう姿は生まれると考えられる。わたし自身も、できるだけその生徒の追究の良さや成果の大きさを助言したり励ましたりしてきた。

五 終わりに

「文法なんて大嫌い。覚えることばかりで、ちつともおもしろくない。」そんな言葉を聞くとたびに「そんなことないよ。こんなにおもしろい言葉ってないんだよ。」と生徒たちに伝えなかった。そんな思いで取り組んだのが、今回の拙い実践である。

生徒たちの発想の豊かさを感じ、少しなりとも日本語に興味をもってくれたことに感謝をし、今後さらに、生徒と共に日本語のおもしろさを探していきたいと願っている。

(さかい ひでき 上田市立東小学校教諭)